

平成 23 年 7 月 26 日（火）西部研究会

唐代の西方浄土変 — 『観無量寿経』 および道綽との関係 —

大西 磨希子（佛教大学仏教学部）

阿弥陀の西方浄土の場景を造形化した西方浄土変は、中国・南北朝時代から作例が現存するが、唐代に入るとそれまでになかった大画面の作例が出現し、作例の数も飛躍的に増大する。本発表は、この唐代の西方浄土変を対象に、これまで看過されてきた二つの視点——『観無量寿経』（以下『観経』）と道綽——に着目し、阿弥陀浄土の造形化がいかなる思想的背景のもとに生み出され、またいかなる意味を付与されて発展・流布していったのかについて考察したものである。

従来、西方浄土変は、当麻曼荼羅のように外縁を有する“観経変相”と、外縁のない“阿弥陀浄土変相”とに二分されると考えられてきた。この見解を最初に提示されたのは松本榮一氏（『敦煌画の研究』東方文化学院東京研究所、1937年）であるが、その主眼は阿弥陀浄土世界の造形化は『観経』とは無縁だとするところにある。しかしながら、『観経』とは阿弥陀浄土を“観る”ための方法を説いた経典であり、浄土三部経のうち阿弥陀浄土の場景について最も詳述しているのは『観経』である。しかも阿弥陀浄土の場景をあらわした図相のなかには『観経』特有の図像が描き込まれている。したがって、西方浄土の場景を可視化するにあたって最重要テキストとして用いられたのは『観経』であったと考えられ、外縁が付加される以前から、唐代西方浄土変は『観経』との密接な関係のもとに成立したものであると思われる。

次に、唐代西方浄土変に影響を及ぼした人物としては、これまでは専ら善導のみに関心が集中してきた。しかし現存する唐代西方浄土変の劈頭を飾る敦煌莫高窟第220窟の作例は、窟内の銘文から貞観十六年（642）ごろの制作になることが知られるが、当時善導はいまだ30歳ごろであり、時期的にみて善導が影響を及ぼしえたとは考えられない。そこで浮上するのが道綽の存在である。道綽は『観経』中心に専一的な浄土信仰を唱導し、その影響力は同時代の道宣が浄土信仰の広流の所以を偏に道綽に帰しているほどであった。その道綽は『安楽集』中に、有相に頼った観想による往生浄土を可能だと説いており、また『続高僧伝』には道綽が十六観を実践し、かつ人々に教導していた様子が記されている。したがって、唐代西方浄土変は、道綽浄土教の宗教的要請にこたえる形で、『観経』十六観の視覚教材としての意義と機能をもつものとして飛躍的に発展し全国的に流布していったものと考えられる。

〔参考：大西磨希子「敦煌莫高窟の西方浄土変に描かれた『観無量寿経』モチーフ」（『南都仏教』83、2003年10月）、同「初唐期の西方浄土変と『観無量寿経』—敦煌莫高窟の作例をてがかりに—」（『仏教芸術』273、2004年3月）〕